



立ち読み版

しまちよアートワークス

2d Illust Collection

Shimachiyō Artworks

Shimachiyo × Myrage Works

3-154

2D Dream Pocket Novels Works

155-264

Other Works

265-339

これまでキルタイムで描かれてきた、
しまちよ先生の作品をまとめたデジタルイラスト集！
過去担当した小説挿絵を中心に、
雑誌で掲載されたイラストや
本作でしか見れない描き下ろしのイラストと、
全300ページ超の大ボリュームの構成になっています！
また、本編は印刷も可能！（PDFファイルで提供の場合のみ）
お好きなシーンを手元において楽しめます！
本編では、このテキストは掲載されていません。



お隣のお姉ちゃんな女子大生は俺のいいなりです 口絵イラスト
[2013年1月]

(すごつ、アナルってこんなキツくって…熱くってつっ…きつ気持ちいいっ!!)

「あひつ、すごつ、はげしつ…壊れちゃうっ…わたし翔ちゃんに壊されちゃうよおおっつっ!」

伸びをする子猫みたいにベンチに爪を立て喘ぐ姉、ガラスに映るその顔はすべての筋肉が弛緩しきったようなだらしない惚け面だ。肩幅に開かれたブーツの脚はガクガクと震えており、その間からポタポタと滴り落ちた蜜がゴンドラの床に淫らな水たまりを作る。

ガラスに反射する前傾姿勢の姉の胸は、抽送のたびゆさつゆさつと激しく揺れている。(おっぱいっ…おっぱいも揉みたいっ!!)

むにいつ！ むにつ、むにつ、むぎゅううううっつ!!

極上の痴態に興奮しきった翔太は本能の赴くまま、姉腰を抱えていた手を腋から回して胸元で揺れる乳釣鐘を驚掴む。

「んやああっつ♥ おっぱい潰れちゃっ…んううっくっ…あつ、あんうううっ…んひいっ♥」

そのまま乱暴に揉みこねると、搾乳に合わせ、肛門がキュンツキュンツとペニスを締め付けてきた。痛がるそぶりを見せる姉の声も、実際は砂糖漬けにされたように甘ったるい。



独占欲を満たされた少年はさらに激しく大胆に腰を使う。思う存分腰を振りたくっているうちにとば口まで射精の欲求がこみ上げてきていた。もう抑えきれない。

(うわあ射精そうっ…：射精すっ、姉ちゃんの膣内に…：ぜんぶっ!!)

「ううう、イクッ…：もう、もうイクよ姉ちゃんっ——!!」

ずぶううっ!! ずぶっ、ずぶっぐちゅぶっ、ずぬゅぶううう——っっ!!

自制をやめた少年は切り離されたロケットみたいの後先考えず一心不乱に恋人の子宮を突きまくる。

「きてっ! 翔ちゃんわたしの中いっぱいにしてっ♥」

ぎゅううっ!! 穂花もまた少年の首に腕を回し、牝腰に美脚を絡ませて。がちりと四肢を絡ませて受精の体勢を取る。姉の熱い抱擁に、剛直がズブリと根元までめり込んだ。

「うああっ——いつ、イクッ——!!」
びゅくんっ!! びゅくっびゅるっびゅっびゅっびゅううう——っっ!!

ペニス全体が膣に埋まった瞬間、少年の咆哮と共に尿道を激感が貫いた。陰囊が空になるかと思うほど大量のザーメンが数珠繋ぎに撃ち出され、姉の子宮へと注ぎ込まれてゆく。「んひいつイクッ、イクのおっ…：翔ちゃんに中出しされてわたしイっちゃうううう

——ッ♥♥♥











(ソフィアのおっぱいっ……上向いてすごい
キレイ：っっていうかエロいっ!!)

仰向けの姿勢にもかかわらずソフィアの胸は綺麗なお椀型を保っており、呼吸に合わせてプリンみたいにフルフルと弾んでいる。先端付近は綺麗な桜色で、頭頂部に実った小豆大の乳頭は既に充血し硬くしこっていた。

乳首、勃起してる——それを見た龍一は夢中で乳果実へとむしゃぶりついていた。

はむっ！ ちゅうっ、ちゅうっ、ちゅうむっ、ちゅううううう——っっ!!

「ひあっ、おっ、おっぱいそんな激しく吸ったらあんっ、んああああ——ッッ♥」

敏感乳首に吸い付かれたソフィアはいいやをするようにブロンド髪を振り乱し恥じら

う。しかしその喘ぎからも彼女が感じているのは明らか、その反応に勇気を得た少年は本格的に少女の胸を貪り始めた。

空いている方の胸は掌でぐにゅぐにゅと揉みこねつつ、指で勃起乳首を摘み上げ紙縊りを作るみたいにクニクニとこね潰す。指の腹で、あるいは舌先で。少女の乳頭がビクビクと充血を繰り返し、より硬く大きく成長してゆくのがわかった。

(もつとっ……もつとソフィアを気持ちよくしたい、ソフィアのこと感じたい……!!)







「どンドンおち ちん……大きくなってる。それに……んつく……あつあつあつ……あ、あたしの……おっぱいが火傷しそうなくらい、熱くなってる。おにい……これちよつと感じすぎなんじゃないの？ 精液お漏らししちゃうんじゃない？」

「そ……そんなことは……」

「嘘ついたって無駄なんだから……。ほら……おち ちんの先っぽからは、もうヌルヌルのお汁が溢れてる。あたしの乳首に絡み付いてくるわよ」

乳房だけではない。水着からはみ出して勃起した乳首をも、未来は愛撫に使用してきた。

膨れ上がった亀頭に、コリコリになった乳頭を押しつけてくる。溢れ出す先走り汁を搦

め捕るように、円を描くように乳頭を蠢かせてきた。お湯ともボディソープとも違う、ネトネトの粘液に桜色の胸が濡れそぼっていく。見つめているだけで、肉茎が内圧でガチガチになっていくのを感じた。

いつ性感が爆発してしまってもおかしくない状況である。

「くふっ！ ふぐううっ！ うっうっうううっ！」







「ふふっ……涉くんたら、すっごい悶え方あ……」

さんざんアヌスを黽つて、静花が髪を掻き上げながら身を起こした。表情はおっとりとしているのに、ペろりと唇を舐める艶めかしさに胸がときめく。彼女は嬉しそうに眼を細め、渉の股間に顔を寄せた。妹が握っている肉竿の先端にチュツと口づけ、そして一気に喉奥へと飲み込んだ。

——ずるっ、ずぶぶぶう！

「ああっ、九条先輩！」

「むあん……ちゅぱっ。あん……そんな呼び方、やあん。いいのよ、名前で呼んで……。もう、あなたは私たちのペットなんだから……。お願いっ……じゅぱ、じゅるるっ！」

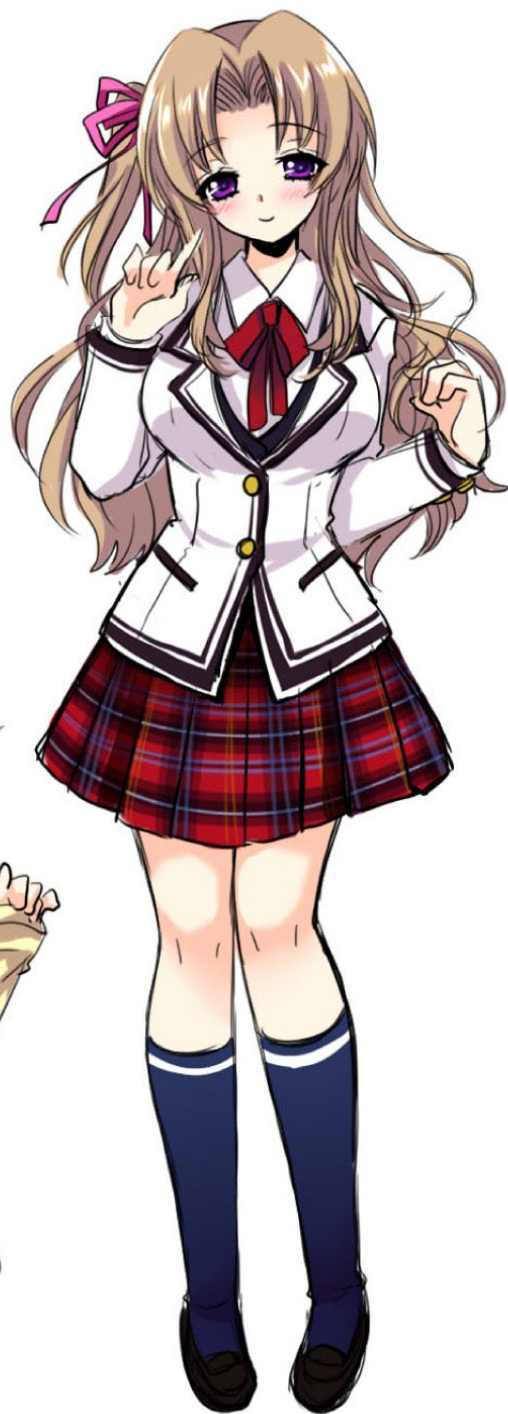
「あああ凄いい！ 凄いですっ、し……静花……さんッ、うあああああ！」

くるくると巻き付く舌が勃起を扱く。熱い唾液が纏わりついて、裏筋をひくつかせる。黽られていた尻穴までが熱くなって、下半身が破裂しそうだ。

「きゃはっ！ 先輩、嬉しそーお。ねえ、幸せ？ あたしたちのペットになれて幸せ？」

淫靡に微笑む小雛が、顔に跨がってきた。眼の前に突き出された女性器に息を飲む。幼かった恥裂はしどけなく綻び、ピンクの肉襞がわずかにはみ出している。







「ああっひっあああつ、嫌っ、嫌あつ、中は、中はやめて頂戴っつっ……！」

「はははっ駄目だ、中出しだっ、おっおっ、おっおっ出る、出るぞっレリーズ！」

彼女を組み敷く獣は嘲るような言葉を投げつけると、身体を仰げ反らせ、ひと際深く腰を撃ち込む。キリアは肉笠が大きく膨らみ、同時に体内で何かが弾けるのを感じ。

どくんっつ……。

ぶびゆるるるるっつ……。

彼女の中で、熱い何かを受胎器官に向けて吹き出し、揺さぶり、染み込んでいく。

「ひあああああああつ!! ……出てますわっ……私、中で……中で射精されちゃってますの……あああ、私、私……あああああ

あああっつ!!」

キリアは絶望と快楽の入り交じった悲嘆の声を上げ、白い肢体を震わせる。

だが、悲痛な表情とは裏腹に、彼女の肉体は射精に強い反応を示した。肉路が搾り取るかのように収縮する。腰がつき上がり、ぶるぶるとわななく。

「おほっひっひひっ……来た来たっ、おひひひっ」 「おっおっおっ……!!」
びしゆるるるっつ……びゅぶぶぶっつ……。







「きもひ、イイツ、体じゆうが、んぶつ、んぐうつ♡」

「こんなにミルクだだ漏れだもんな、俺たちが補給してやるよっ」

胸の肉果からは絶えず母乳が溢れ、それだけでも快感の小爆発を繰り返しているのに、舌や喉奥、膣粘膜に肉芽が痺れっぱなしで、思考にかかったピンクの靄が晴れてくれない。

(私……もつとイキたいっ！)

「はむう、んちゅつ、れるう♡ もつと、えぐってつ、おまこにい、あちゅいのそそいでえつ♡」

じゅぶつ！ じゅぶつ！ 積極的に腰を振り、頭を前後させて肉棒を味わい、墮ちたボテ腹水着少女はさらなる快感をねだった。

「うぐつ、涼河ちゃんイクよっ」

「んぐつ、はふつ、うんんん♡」

上下から女体を貫くペニスが太さを増す。

反応した媚体がギュウつと締め付けた瞬間

——どぶつ、どぶるるっ！

「ふぶつ、んくうツ、わたしもお、しえいえき注がれてイクウウツ！」

こじ開けられた子宮口に、喉奥に、熱い粘液が浴びせかけられる。



「はあはあ……私は勇者マサキと別れ……これからはダーク・フレアとして高貴で偉大なる皇子レイドルフ様に一生死ぬまで絶対の忠誠を……はあうん、誓います……あ、ああくくくくんっ」

言い終わった瞬間脳内に閃光が走り、フレアは軽いエクスタシーに襲われてしまう。

三つの孔をすべて犯され、ヴァルキュアとしての力すべてを失い、闇の力に屈服する。最悪の事態のはずなのに、それがなぜかフレアの心を甘く腐敗させる。もつと堕ちてみたいという狂った欲求に突き動かされ、激しく腰を振りながら自らマゾの毒蜜にどっぷりと浸かっていく。

「よく言えたわねえ、フレアちゃん……いえ

ダーク・フレア様！」

パピヨンのペニス根元まで埋め込まれ、激しく脈動した。根元がボコツと球のように膨らみそれがそのままフレアのアヌスの中へ

「ひいい、あつ、あああ——っっ！」

腸の中を大きく熱いコブが駆け上がってくるのを感じ、フレアの背中はずずつと総毛立つ。まるで火の玉をお尻にぶち込まれたような異様な感覚。そして深く一メートル近く潜り込んで、勃起先端に達した直後、もの凄い勢いで白濁が噴き出した。そこはちょうど子宮の裏側だった。



淫らな屈伸運動をさらに加速させ、ジューブッグチュンツと、淫靡な水音をわざと白昼の街に鳴り響かせる。もう我が身を顧みる余裕もなく、血肉も溶かすような爛れた露出の快美に呑み込まれていく。

快感に仰け反る美貌は淫悦にとろけ、目尻を下げた瞳は焦点を失い、ハアハアと喘ぐ唇の端からは涎まで垂れている。正義のヒロインとは思えない、牝そのものヨガリ顔だった。「はああ……ああ……勇者様も見てくださいい……あああん……も、もう……私……」特にマサキの視線を意識すれば、背徳感と羞恥が燃え上がる。それがさらに倒錯の快感を倍加させ、姉姪を狂わせた。双乳を千切れんばかりに揺さぶり、汗の雫をまき散らす。

流れるような髪を背中に打ちつけ、被虐のラストスパートに鞭を入れる。膣襞が今際の際にピクピクと痙攣し、それが強烈な締めつけとなって男根を搾り上げた。

「うおっ！ こんなエロい腰使いする女は初めてだぜっ」

「ン……ああ……ミルクを……く、ください……んちゅば……ムーンのお口とア、アソコに……オチチンのミルク、飲ませてください……くちゅん」

急ぎ立てられるように腰が貪欲にうねりだし、戦闘員とピッタリ息が合っている。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>